

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (66)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

たびたび触れていることであるが、本連載「語釈」では Basic 言語にも関心を抱いていた英国の小説家 G. Orwell の *Politics and the English Language* (1946) 『政治と英語』、また全体主義で語の意味までを制御 (コントロール) する国家を描いた *Nineteen Eighty-Four* (1949) 『1984 年』 なども意識下に置いた「政治言語」を扱っている。今回は Trump 氏の tweets で (1) デンマーク自治領グリーンランドの米国買収に関するもの、(2) 米国の Billy Graham 福音伝道師の死去を悔やむ内容のものを神秘的響きをもち「神と語るための言語」としても知られる スペイン語 (翻訳版) とともに対照することで見てみる。

(1) Denmark is a very special country with incredible people, but based on Prime Minister Mette Frederiksen's comments, that she would have no interest in discussing the purchase of Greenland, I will be postponing our meeting scheduled in two weeks for another time. (August 20, 2019)

▲「デンマークは立派な国民をもつ特別な国だ、しかしメッテ・フレデリックセン首相は米国のグリーンランド買収の話にはまったく関心がないというコメントを出したので、2週間後に予定されている首脳会談はまた別な機会に延期する」という内容である。

Trump 氏にしては珍しく感嘆符 (!) なしの tweet である。なお、記号 (!) は本連載初回(1)で触れたが喜びの叫び声のラテン語 Io (ワーツ) に由来する。I と o を上下に並べたのが ! 記号である。

不動産王の彼は Denmark の自治領 Greenland を買いたいと思い、売却されないかと考えていた。ビジネスマンの彼らしい大きな不動産取引の構想である。Greenland に米国ニューヨーク市 5 番街の Trump Tower と似たビルでも建てようというのか? しかしデンマーク首相はまったく関心なし(no interest)だというのである。歴史的に米国はフランス領の南部 Louisiana (ルイジアナ) を、またロシア領の北西部 Alaska (アラスカ) を購入してきた [地名 Louisiana と Alaska はその音の響きとスペリングから前者のフランス語・後者のロシア語らしさが感じられもするが、音感からも把握しておくことには意義がある。英語の onomastics (地名・人名など固有名詞学) の専門研究分野となる]。

文中の incredible (信じられない) はもちろん Basic 語 **credit** を埋め込んでいるが、この場合は「信じられないほど素晴らしい」の意味でプラス (+) のイメージ語となる。

太線語 comments は本連載(59)の(1)で扱ったが、確認である。(57)の(2)では monument と同系だと言った [monument は(20)の(2)でも見た] が、Basic 語をあてがって考え **mind** などを想起したい。英語で多くの語が同系として一括される [拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(28)参照]。

太線語 postponing (< postpone 「延期する」) は Basic 語 **put** などと同系で、PIE etymon の morphophoneme (形態音素形) は/PEL/が復元されている [同上拙著、第二部、例(8)参照]。

太線語 scheduled の schedule の音声は[skédʒu:l]とともに[jédju:l]ともなることから考えるとよい。Basic 語 **scissors, screw, skirt, short, shirt, sharp, ship, shelf** など、プラス α Basic 語 *shore, screen, share* (株・株式) など、un-Basic 語 *scratch* (引っかく)、*skill* (技)、*shave* (剃る)、*shuffle* (ごちゃまぜにする)、*shredder* (シュレッダー) なども同系で「切ること」が原義だとは本連載(2)の②、(59)の(2)で言った。印欧祖語の語根 PIE etymon の morphophoneme は/SKER/が復元され、schedule (スケジュール) とは「切り取ったもの」ということ [同上拙著、第二部、例(6)参照]。

これは 1 文での tweet であるが decoding 化し回転 MSOE スクリーン上に乗せ、英語文の分かり方を平面的ではなく立体的・動的に見ることで deep pattern (深層パターン) の見定めともしたい。本連載(56)でも触れておいたが 電光掲示板など、文字が知覚的に動いている「ように見える(seem / as if)」仮

現運動(apparent movement)のメカニズムとも関わり背景では数理的微積分(calculus)がある。

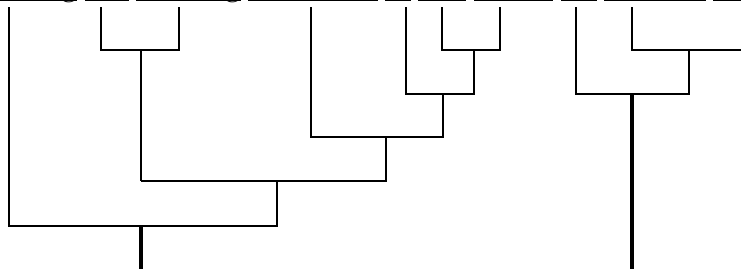
STATEMENT					
		THEME : NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N ₁	COP/V	N ₂ /N ₃ /A	ADV
1	φ	Denmark	is	a very special country	with incredible people, (/)
2	but	φ	based	φ	on Prime Minister Mette Frederiksen's comments,
3	that	she	would have	no interest in	φ
4	φ	φ	discussing	the purchase of Greenland, /	φ
5	φ	I	will be postponing	our meeting	φ
6	φ	φ	φ	scheduled	in two weeks
7	φ	φ	φ	φ	for another time. //

(備考) 単一斜線 (/) はこの文の意味的2分割線。無の空項 φ にも意味があると考える。

7層の文である。意味的に φ (空) の項にはいわゆる何も存在しないのか? **There's no there there.** か? [本連載(60)の(1)参照]。81個の升目をもつ将棋盤での対局では、駒が何も置かれていない升目にも刻々と変化するその局面(状況)ですべて意味があるだろう。ここでの φ を構造主義者 L. Bloomfield や K. L. Pike 風の tagmeme (文法素) としての **filler** (充当詞) er, well, you know 「え〜、あの〜、その〜」など間取りの口ごもりのものという解釈は可能だろうか? 仮にそう解釈すれば φ もすべて意味ある項となってくる。換言すれば **There's there there.** ともなる [実際、英語の "There!" は "ほら!" の意味で、interjection (間投詞) として上記の感情記号 (!) に象徴されもする]。

ここでは文の意味的2分割線が... Greenland, I ... の I の前となることと、文中の下線で示した語 for が前の **postponing** と **syntax** (統語法) 上で **linkage** (結合) することを見抜きつつフォローし理解することとなる。この **postponing** と **for** の共起関係を見るため immediate constituent analysis (直接構成素分析: IC 分析) 風には次のように示してよかろう。これを「文の集中構造(sentence concentric structure)」と称したいが、英語の広義での **pattern 認知の問題** と関わるはずだろう。

... postponing our meeting scheduled in two weeks for another time.



科学としては数学に最も近い形で言語を **synchronic** (共時的) [cf. diachronic (通時的)] に見る structural linguistics が打ち立てた IC 分析も、上でのスクリーン上で見るような文の分かり方の一端を示すものと言える。目下、筆者は英語の「読み取り方」と「聴き取り方」という視点から『英文の分かり方: 7つの方法』(Seven Ways of Reading and Hearing English) というテーマの下で思索しているが、その7つの仮説的に有効な方法の1つが本連載で提示し扱っているこの種の MSOE モデルと IC 分

析などをセットにしたものとなる。他の6つの方法は何か?であるが、本連載初回(1)から一貫して示してきている。その見定めだろう。本連載(63)でも言ったが元来 Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* (1923) も意味の問題を基本的に「読み・聞く」視点から考えている。

本連載(49)などで触れたのであるが、上の1文で書かれている tweet による text 文の逆さ読み(reverse reading) による効果的な定着法をここでは文層(STR) 5, 6, 7 のみを例として扱っておく。

for another time → in two weeks → in two weeks for another time → scheduled → scheduled in two weeks for another time → our meeting → our meeting scheduled in two weeks for another time → will be postponing → will be postponing our meeting scheduled in two weeks for another time → I → I will be postponing our meeting scheduled in two weeks for another time. (私は2週間後の予定の会談はまた別な機会に延期するつもりだ)。

文を一種の mirror-image (鏡像) で見る要領で、四角内の語句を唱え次々に重ね合わせていくのである。words が一定の深層 pattern に基づき sentence となっていく過程の一端を見ることとなる。次々と与えられる new information (新情報) を given information (旧情報) としてしまう要領である。同時にこの逆さ読みによる繰り返して文そのものが確実に脳裏に深く根付く秘技となる。

本連載でのテーマ内容はやはり結果的に上記、英文の読み・聴きでの分かり方での7つの方法に収束すると考えている。この方法をさらに意識下に置き次の tweet 文例を見てみるが、本連載での text 文例を Basic でならどう言うか?も常に意識している。基本的にすべて Basic で言えると思うが、なぜ Basic ですべて言えるか?という Basic 言語学(ogdenology)が背景にもつ理論的哲学思想 philosophy {philo (= love) + sophy (= to be wise, to have knowledge)}のほうに筆者はより強い関心を抱く。

数学 mathematics {mathemat (= mind) + ics (= science)}での無数の問題(文章題)も数少ない一定の pattern である定理・公式に基づいて解き明かされるわけで、その定理・公式そのものの証明のほうに目を向けるのが本来となる。学校機関で数学が根っから好きな学習者はやはり問題解き以前に、まずは定理・公式の証明法そのものが納得したいはずだろう。定理・公式の証明そのものが曖昧のままで機械的に問題解きをしている学習者とは雲泥の差がでるはず。Basic の場合も、数学での定理・公式 [theorems (< theory)]に相当するものを hypothetic (仮説的) {hypo (= under) + the(t) (= theory) + (tic) (= to have)}にも求めたいものである(仮説は真偽性よりも仮説提示そのものに意義がある)。

[以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01-05)より — 2言語対照]

(2) Our nation's motto is IN GOD WE TRUST. This week, our nation lost an incredible leader who devoted his life to helping us understand what those words really mean. We will never forget the historic crowds, the voice, the energy, and the profound faith of Billy Graham! (February 23, 2018)

cf. El lema de nuestro país es EN DIOS CONFIAMOS. Esta semana, nuestro país perdió a un increíble líder que dedicó su vida a ayudarnos a entender el verdadero significado de estas palabras. ¡Nunca olvidaremos las multitudes, la voz, la energía y la gran fe de Billy Graham! (23 de febrero, 2018)

▲ 「わが国家のモットーは IN GOD WE TRUST (われら神を信じる) である。今週、この言葉の真の意味をわれわれに理解させることに生涯を捧げた偉大なるリーダーを失った。Billy Graham (ビリー・グラハム) 福音伝道師に聴き入ったあの史上まれな数の大群衆、あの声、あの活動力、そしてあの深い彼の信仰心をわれわれは決して忘れはしない!」という内容である [アメリカで Billy Graham 氏に関して知らない人はまるでなかろう]。IN GOD WE TRUST. の4文字モットーは米国紙幣の裏にも印字されているが、ここでの語配列も GOD が先で WE が後ろとなり良い語整序法である。

なお、god に関連し EP 本 I・II では人との別れ際で Good-by(e). [May God be with je (= you).] とも言えない理屈となる [EP 本 III, p.151 参照]。関連しては Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* で論じられる This is good. と This is red. などの違い(p.125)ともなるが、後者の This is red. はいわゆる定義上では ostensive definition (実物連想定義) の問題ともなる。

ついでながら *The Meaning of Meaning* での Reference (指示)・Symbol (象徴)・Referent (指示物) の関係からは感情的(emotive)なキリスト教的三位一体(the Trinity)〔神(*God*)、神の子(*Jesus Christ*)、聖霊(*Holy Spirit*)〕での the Triangle of Reference (意味の三角形) の底辺は、同書 Supplement の I で B. Malinowsky が示唆する論点(pp. 296-336)からしても点線ではなく実線となるはずだろう。

キリスト教との関連で旧新約の **Basic 聖書 BBE (*The Bible in Basic English*)** は Basic 研究では必須の文献である。BBE にはプラス α Basic 語が全 910 頁のどの頁にも頻出する。Basic 言語を 850 語の世界だと思い込んでいると BBE に接した瞬間に「振り出し(square one)」に戻る感情を抱くだろう。

次にここでの tweet 文例中の太線語 motto (モットー) の由来は何か? であるが、実は onomatopoeia (擬音語) とするのが今日の学説である。本連載(15)の冒頭で PIE etymon の/MOM/からの擬音語 munch (ムシャムシャ食べる) を扱ったが同系である。motto は口で「モグモグ言う」ということである。mutter, mumble (ブツブツ言う) も同系〔それぞれ接尾辞の -er, -le は反復の意味〕。また、モグモグ言うことがしばしば曖昧ともなり音が消えたりするが、mute (黙る・消音) なども同系。

さらに太線語 trust も本連載(33)の(1)で扱った。確認となるが、Basic 語 **tree, tray, true** と同系であるし、un-Basic 語 trunk (木の幹)、truce (休戦・停戦) とも同系。「樗(かし)の木のように堅く信ずること」という語感がある。「休戦」も信頼関係で成り立つ〔同上拙著、第二部、例(34)参照〕。

文中での下線部 helping us understand は helping us to understand の to の省略される例で help は事実上「使役」の「~させる」の意味となる。これを This week, our nation lost an incredible leader who devoted [**helping, his, life, to, understand, us**] what those words really mean. という形での語整序のテスト問題で his life to helping us understand とすんなり正解できるか? できる能力はやはり **pattern recognition** (パターン認知) から来るはず。ここでは devoted his life to helping us understand なわけで、to はそのように処理されることになる〔こういう pattern 認知力を Basic 文例に限定して素早く培うには拙著『基本語で考える英文整序法：語配列の手順』松柏社(2009)の活用は有効であろう〕。なお、文中の profound (深い) は found が「底」の意味であるとして前回扱った。

cf. のスペイン語 lema, Dios, confiamos (< confiar), increíble, líder, dedicó (< dedicar), vida, verdadero, significado, nunca, multitudes, voz, energía, gran, fe は、それぞれ英語 lemma, Divine, confide, incredible, leader, dedicate, **living**, verified, significance, **never (no + ever)**, multitude, **voice**, energy, **great, faith** に対応し同系語 (太字体は Basic 語、イタリック体はプラス α Basic 語)。

ところで一連の本連載のようなテーマを筆者が大学の教室で扱っていると仮定すれば、理解度の「評価(assessment)」のための testing での試験問題の 1 例としては学生に白紙の用紙を配布し、上の(1), (2)のような tweet 文の 3~4 例をネイティブではない点が問題ではあるが自ら読み上げ、それを transcription (書写) させ〔人名・地名等で煩雑なものは前もって板書することはある〕、他に上述のような事項の若干の問いを口頭や板書で適宜行い学生側は解答を紙に書き下す。それで終わり。

読み上げ文では句読点などを含め正しく transcription されていれば基本的に意味も理解されている はずではあるが、その日本語への変換も日本語表現力を見る上でよい。日本で実用的にはこういう簡素な試験問題でよいわけではある。細かないわゆる客観的テスト問題は小手調べ的なもので採点者には簡便で実用性があるが、実際には実用度は低いものが多い。英語以前に日本人なのであり、実用的な英語力はつまるどころ文字・音声を介した敏速な英⇄日の変換能力ということになる〔本連載での Trump 氏の tweet 文例はすべて日本語でも示しているが、専門的には日英語の対照研究(contrastive studies)の一端ともなる〕。世界の英語ニュース報道など音声の文字起こしを専門とするプロの transcriptionist や、翻訳者・通訳者(translator / interpreter)のように文字・音声を介した日英語の相互変換問題がもっと真剣に考えられてよい。学校機関での英語の取り扱い方で実用的である。

なお、文学作品として簡素な style (文体) で Basic 言語を考える上でも示唆を含む米国の小説家 E. Hemingway の作品への言及は Ogden-Richards の言語哲学書 *The Meaning of Meaning* (1923) や Richards の文芸批評書 *Practical Criticism* (1929) に見られないが、E. Hemingway の処女作は *The Sun Also Rises* 『日はまた昇る』(1926)であり、発刊年を考慮すれば納得されよう。